

## 岩手医科大学歯学会第27回例会抄録

日時：平成元年2月25日（土）午後1時30分

会場：岩手医科大学歯学部C棟6階第4講義室

### 演題1. ELISAによるB,C,G群溶血レンサ球菌に対する抗体測定

○田近志保子, 本田 寿子, 佐々木 実,  
金子 克

岩手医科大学歯学部口腔微生物学講座

慢性疾患児・虚弱児収容施設の小・中学生を対象にELISAにより、B群、G群溶血レンサ球菌分離陽性者と陰性者の抗体測定を行い、分離陽性者に、群特異IgG、IgM抗体の上昇を認めこれまで報告してきた。

今回は、C群溶血レンサ球菌を含めて、B,C,G群相互の関係を検討し、その特異性の確認を目的として、ELISAによる抗体測定と、1984年1月から1988年12月までの溶血レンサ球菌の分離状況をあわせて報告する。

(1) 1984年1月から1988年12月までの分離状況を見ると、1987年5月から1988年12月までG群の分離率の高い月が続いた。また、年度ごとの分離率を5年間の平均と比較すると、1984年はB群、1985年もB群、1986年はA群、1987年はA群とG群、1988年はG群の分離率が高かった溶血レンサ球菌全体の分離率は14%から20%で平均16.4%であった。

(2) ELISAによる溶血レンサ球菌分離陽性者の抗体測定では、B群溶血レンサ球菌分離陽性者（3名）では、B群に対する特異IgM抗体価は1.024倍から512倍、IgG抗体価は2.048倍から1.024倍、C群溶血レンサ球菌分離陽性者（2名）では、C群に対する特異IgM抗体価は256倍から128倍、IgG抗体価は512倍から256倍そしてG群分離陽性者（10名）では、G群に対する特異IgM抗体価は512倍から64倍、IgG抗体価は1.024倍から128倍であった。B、C、G群いずれの場合も分離した群以外の抗体価はIgM、IgG抗体価共に4倍以下であった。

(3) 少数例ではあるが、継続的分離を行っているなかで、同一人で分離溶血レンサ球菌の群が変わった例でも、抗体価の推移をみると、分離した菌の群特

異抗体の上昇が確認できた。

以上の結果よりB,C,G群間では交差反応はなく群特異抗体の上昇が確認された。今後さらに症例数を増して検討して行きたい。

### 演題2. 根管治療用器具の破損状態

—その3、エンジン用Hファイルの観察—

○久保田 稔, 中嶋 和郎, 寺田林太郎

岩手歯科大学歯学部歯科保存学第一講座

器械的な根管の拡大清掃は、安全性や手指感覚を考慮したhandpieceまでも開発されるに至り、一般に広く普及する様相を呈している。

我々は、廃棄されたエンジン用リーマーの、廃棄あるいは破断状態を本学会に報告して<sup>1-3)</sup>来た。今回は、エンジン用Hファイルについて報告する。

〔材料ならびに方法〕臨床に使用し廃棄されたHファイル15本（15号1本、20号6本、25号5本、30号、35号、40号各1本）である。これまでと、同様の方法<sup>1-3)</sup>で観察した。

〔結果ならびに考察〕破断は、15例中の10例、66%に認められ、破断部位は、先端から2～3mmの所にあった。破断例には、フルーツの間隔に延びを認めたが、逆ねじれを示した症例は無かった。SEMで側面を観察すると、リーマーのN型亀裂<sup>3)</sup>に類似した幅の狭い亀裂が全ての破断症例に認められた。発生部位は最も応力を受ける刃の付け根に多く、走行方向は軸に傾きを有していた。先端方向からの観察により、粗糙と平滑な二つの異なる部分が認められた。粗糙な部分には、延性破壊を示すエロンゲートディンプルが、平滑な部分には、疲労破壊を示すストライエーションが所々に観察された。

回転による応力は、刃の付け根に集中する。この部の金属疲労により亀裂が発生する。亀裂が一度発生すると、この部はより応力の集中を受ける。この応力集中部分は、立体的には長軸に約45度の傾きを有するラセン状である。このため亀裂は、軸にある

角度持って上下および深部に進行し、最後に延性的な力により破断したと思われる。

〔文 献〕

1. 久保田 稔, 中嶋和郎, 小原雅彦, 小山田勇樹: 根管拡大器具の破損状態; 歯界展望 (臨時増刊号), 71(3), 823, 1988
2. 久保田 稔, 中嶋和郎, 小原雅彦: 根管拡大器具の破損状態—その1 破壊されたエンジン用リーマーのマクロ的観察—; 日歯保誌, 31(1), 241, 1988
3. 久保田 稔, 中嶋和郎, 寺田林太郎: 根管拡大器具の破損状態—その2 破棄されたエンジン用リーマーのミクロ的観察—; 日歯保誌, 32(2), 投稿中

演題3. 口腔外科領域に於けるレーザー手術の臨床経験と問題点

○大屋 高德, 小早川 隆文, 福田 喜安  
藤岡 幸雄

岩手医科大学歯学部口腔外科学第一講座

近年各種レーザーが医学領域において臨床応用され、私ども口腔外科領域の臨床例として、良性腫瘍、悪性腫瘍の治療法の一つに適応を選んでレーザー手術を実施してきた。レーザー外科では炭酸ガスレーザー、アルゴンレーザー、Nd-YAG レーザーの3種があるが、私どもが使用した炭酸ガスレーザーとNd-YAG レーザーには、各々の特徴がありその適応には充分に考慮して選択し治療すべきであると考えられた。

一般にレーザー手術の利点としては、出血が少なく創部の治療が秀れていることや、粘膜炎、顎骨壊死などの副作用が少なく、二次治療の支障とならない点が上げられる。私どもは昭和59年から63年までの5年間に12例のレーザー手術を経験した。即ち、血管腫4例(舌2例, 口唇2例), 乳頭腫2例(舌), リンパ管腫1例(舌), 白板症2例(舌)さらに悪性腫瘍として舌癌2例, 黒色腫1例(頬・下唇粘膜)である。これらレーザーの適応例として、CO<sub>2</sub>レーザー手術例には、リンパ管腫, 乳頭腫, 黒色腫, 白板症に使用し、YAG レーザーでは血管腫と舌癌に適応した。一般にCO<sub>2</sub>レーザーの特徴として、細胞の気化、蒸散に優れていて、早い組織破壊効果を見る。そして切開能が非常に優れている点が上げられる。一方、YAG レーザーは、操作性に優れ、良好な血液凝固と効果的な止血がはかられる。そしてレ

ザーの組織深達性と拡散性が大きいという特徴を備えている。以上、私どものレーザー手術の臨床施行例において口腔外科領域では次のことがまとめられた。

すなわちレーザー手術は、術中の出血が少なく術後創に生じる癬痕がきわめて少なかった。また比較的限局性で小範囲(約2cm未滿)の良性腫瘍にはレーザー手術は非常に効果的であったが、舌癌手術においては、CO<sub>2</sub>とYAGの両方を使用しながら手術をした方が良い結果が得られると考えられた。また、腫瘍が大きく深在性のものに対し、レーザー手術にも限界があり、その特性を生かしながら各種治療法と合せて適応すべきであると考えられた。

演題4. 楽器吹奏に起因する急性歯科疾患の一例

○中野 久士, 古跡 由紀子, 桜田 光男,  
松丸 健三郎, 上野 和之

岩手医科大学歯学部歯科保存学第二講座

疼痛を伴う歯科疾患の中には、その原因が明らかにしにくい例が多くみられる。今回、歯周病変由来か、歯内病変由来のものかの鑑別が難しく、楽器の吹奏が原因と思われる症例に遭遇した。患者は、14歳の女子中学生であり、13周囲の歯肉と歯の持続的な激しい自発痛を主訴として本学を受診し、慢性歯周炎の急性化を疑われ、第二保存科に紹介された。当初、激痛のため明確な歯髓診断はできず、X線写真でも辺縁性の歯槽骨吸収や根尖性病変を示唆する透過像は認められなかった。この為、膿瘍切開のみに留めたが改善せず、その後の歯髓診断で生活反応がみられなくなり始めて12の急性根尖性歯周炎と診断できた。通法による根管処置及び消炎処置により、症状の著しい改善を認めた。既往歴には特にのべる事項はみられなかった。患者は昨年よりクラリネットの吹奏を頻繁に行っており、咬耗も見られたことから、患歯部で特に強く接触させていたようである。持続的な楽器の吹奏が慢性刺激として長期にわたり下顎前歯部に作用して、歯髓に血行障害をおこし歯髓が壊死し、ひきつづき急性症状を起こしたのか、又は摩擦や亀裂を引き起こし、露出した象牙細管からの感染の可能性も疑われた。いずれにせよ診断が非常に困難であり、現病歴と口腔内診査、特に楽器吹奏者に対しては楽器吹奏が不正咬合と関連性があることから一般的診査の他に歯列状態等